

いつの頃だったか、私の家の前の児童公園に、同報無線の屋外拡声器用の電柱がによきりと姿をあらわした。日当りを気にして公園を承知で家を建てたのだから、もちろん誰に文句をいう筋合いのものでもない。

それどころか災害問題にたずさわっているものとしては、このような設備が普及していくことは喜ばしいといわなければならない。そう自分にも家のものにもいいきかせた。ところがそうした思いはなんと無残にも、数日にして吹き飛んでしまったのだった。頭上でピーというシグナルを発したとおもうと、「こちらは〇〇市役所です」という雷のような音が降ってきたのである。それからは受難の日々といってよいだろう。「今日午後〇〇時頃、赤いセータを着た三才の女の子が迷子になりました。お心当たりの方は……」、 「交通安全週間がはじまりました。運転には気をつけて……」、 はては「本日、市議会の定例会議が開かれております。議題は……」とつきつぎとおかまいなしに

一方的に情報が降ってくるのである。

そのたびに耳をおさえ、息をつめ、放送がおわると家のものと顔を見合わせ、「いまの放送なんだった」、「知らない」。

いまでは住民の誰もが、これを市の連絡

用のものと思ひこみ、災害情報伝達の設備と考えているものはないようである。私がそれを告げても、「あら、地震のときも、これで知らせてくれるんですか」という答えが返ってくるのはまだいい方で、ときには疑わしい目

付きで「嘘でしょう」といわんばかりの反応に接し、不覚にもたじろぐ始末である。

一昨年『住民に対する災害情報伝達システムの確立に関する調査委員会』の委員をつとめた一人としては、なんとも複雑な思いであることはいうまでもない。というよりやり切れない気持ちだといった方がよいかもしれない。もちろんこのように情報の内容に緊急性があるかどうかの検討もなく、また季節や天候によって拡声器による放送がどれだけの範囲にまでとどき、その内容が聞きとれるかといった調査ひとつ行うこともなく、安易に行政からの連絡用に使われているのは、私の住んでいるところだけではないだろう。それだけに緊急の災害情報のさい、さたして何人の住民がこれに耳を傾けてく

れるだろうかと思うと暗澹とした気持ちになる。

ともあれ私は、今日もまた雷のような音の下で、耳をふさぎながら、うらめしげに拡声器を見上げている。

## 随 想

### 屋外拡声器は誰のもの

秋 元 律 郎

広域防災応援体制に関する調査研究委員会委員長  
早稲田大学文学部教授